

〈不尽山〉の発見

—— 赤人・虫麻呂歌をめぐって ——

高 松 寿 夫

山部宿祢赤人望 不尽山歌一首并短歌

天地の 分かれし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる 布
士の高嶺を 天の原 振り放け見れば 度る日の 陰も隠ら
ひ 照る月の 光も見えず 白雲も い去きはばかり 時じ
くぞ 雪は落りける 語りつぎ 言ひ継ぎ往かむ 不尽の高
嶺は

(三一七)

反 歌

田児の浦ゆ打ち出でて見れば真白にぞ不尽の高嶺に雪は零り
ける

(三二八)

詠 不尽山歌一首并短歌

なまよみの 甲斐の国 打ち縁する 駿河の国と ちこち
の 国のみ中ゆ 出で立てる 不尽の高嶺は 天雲も い去
きはばかり 飛ぶ鳥も 翔びも上らず 燎ゆる火を 雪以ち
滅ち 落る雪を 火用ち消ちつつ 言ひも得ず 名づけも知
らず 霊しくも 座す神かも 石花の海と 名付けてあるも
彼の山の 堤める海ぞ 不尽河と 人の渡るも 其の山の

水の当ぞ 日本の 山跡の国の 鎮とも 座す祇かも 宝と
も 成れる山かも 駿河なる 不尽の高峯は 見れど飽かぬ
かも

(三二九)

反 歌

不尽の嶺に零り置く雪は六月の十五日に消ぬれば其の夜ふり
けり

(三三〇)

右一首高橋連虫麻呂之歌中出焉 以類載此

(三三一)

『万葉集』に相隣接して掲載される山部赤人と高橋虫麻呂との
「不尽山歌」については、従来、この二人の歌人の詠風の違いに
注目して比較検討されることが多かった。確かに、この二つの作
品には、同じ不尽山を扱いながらも、その詠風には大きな相違が
存する。赤人歌は、山の偉容を讃美するにも視点を天象に関する
ことに絞り込み、反歌で明示されるように詠者の位置を固定する。

これに対し虫麻呂歌は、讚美の対象がより広汎であり、詠者の視点は固定されない。古典集成の頭注は三一九歌について「三一七歌に比して叙事的傾向が目立つ」とするが、つまり非常に散文的な叙述の仕方である。

このような相違点は確かにその通りで、そのような観点からの検討も必要である。しかし、この二つの「不尽山歌」の共通点についてまず考えてみるべきだったのではないかと、稿者は考えるのである。果して、ほぼ同時代の二人の歌人によって同じ不尽山が詠まれたことが、単なる偶然であり得たのだろうか。この二つの作品には、何か共通の背景があるのではないか。このような疑問を抱く根底には、赤人・虫麻呂以前の人々が、果たして不尽山を観て感動することが出来たのだろうか、という問題意識が存する。もっとも、個人の感興について云々するべきではない。これは、不尽山の如き山から催される感興を、即座にそれをテーマとして歌作することが当時の人々に可能だったろうか、ということに対する疑問である。もし、それが可能であったとしたら（従来の諸論では当然可能だったと考えられて来たようだが）、赤人や虫麻呂の「不尽山歌」以外にも、同様の発想による山の偉容を讃える詠作が、当然有って然るべきであろう。果してそのような歌が赤人・虫麻呂以前に存在するかどうか。

一

『日本書紀』に次の歌謡が見られる。

隠り国の 泊瀬の山は 出で立ちの 宜しき山 走り出の

宜しき山の 隠り国の 泊瀬の山は あやにうら麗し あやにうら麗し
(紀一七七)

泊瀬山を称讃するのが一首を貫くテーマであり、確かに「山讃め歌」となり得ている。この歌は、少なくとも『書紀』成立（養老四年）以前に存在した筈で、『万葉集』でも大歌的な歌々を集めたと思われる巻十三の挽歌（三三三）に、この歌の表現を利用したものが見られ、比較的古くからあった歌謡と考えて良からう。赤人・虫麻呂以前の歌であることは間違いない。このような歌は『万葉集』巻十三にもう一首見られる。

三諸は 人の守る山 本辺は 馬酔木花開く 末辺は 椿花開く
うら妙し 山ぞ 泣く児守る山 (三三三)

この歌も、「三諸山讃歌」とも名付くべき歌である。この歌が、末を五・三・七で結ぶ特殊な歌体を有していることは見逃せない。この歌体、雄略御製歌（一）や中大兄の「三山歌」（二）、額田王の「三輪山歌」（二六）など、初期万葉の長歌に独得の歌体であった。従って、三三三二歌も、万葉歌としてはかなり早い時期の成立が想定される。

それでは、赤人や虫麻呂の「不尽山歌」も、泊瀬山や三諸山の「山讃め歌」のような発想を受けて出来たのであろうか。確かにそのような部分を否定することは出来ないであろう。しかし、「不尽山歌」の内容を見ると、赤人歌といひ虫麻呂歌といひ、伝統的な発想の順調な発展の上に出来するものではないらしい、ということもいえそうである。

二つの「不尽山歌」は、共に不尽山の高さに注目して讚美する

が、実は山の高さというものが讃称の視点になるということは、伝統的な発想には見られないものである。山が高い、などというのは当り前のことにも思われるが、上代の山の捉え方の中ではけっしてそうではない。

倭は 国の真秀ろば 畳な付く 青垣 山隠れる 倭し愛し

(記一三〇)

『記』『紀』共に掲載する有名な歌謡であるが、この歌を始め上代の讃歌の中では、山はしばしば「畳な付く青垣」の如しとされる。人麻呂も「畳なはる青垣山」(一三三八)といい、赤人も「たたな附く青垣隠り」(六一九二三)と歌っている。いずれも山々がお互いに重なり合い寄り添い合っている状態をいっており、そこには、一峰ぬきん出た秀嶺の姿は見るべくもない。又、「畳薦平群の山」(記一三一)「八重畳平群の山」(一六三八八五)「木綿畳手向の山」(六一〇一七)などのように、特定の山の枕詞に「畳」の語を含むものが多いのも、従来の掛詞的語源解釈は不十分なものというべく、これらの発想の核には、「畳な付く」山並みを称讃した上代の意識が込められているのであろう。伝統的な発想に於いて山の高さが問題になるのは、

吾妹子をいざ見の山を高みかも日本の見えぬ国遠みかも

(一四四〇)

棕櫚の山を高みか夜隠りに出で来る月の光乏しき

(三一九〇)

の如く、山が障害として立ちはだった時であったようだ。従って、同じ不尽を詠むにも、

不尽のねのいやとほながきやまちをもいがりとへばけによ
ばずきぬ
(一四一三五六)

などは、よほど一般的な捉え方をしているのである。山の素晴らしさの一つとしてその高さに注目するのは、人麻呂の「吉野讃歌」にその兆しを見る(此の山の弥高しらす「三六」)が、一方で人麻呂は従来の発想でも高い山を歌う(「石見相聞歌」の第一歌群にそれは顯著である)。そのような流れの中で、二つの「不尽山歌」が共に、讃美の視点の中心にその高さを挙げていることは、やはり特異なこととして洋目しななければならない。

更に「不尽山歌」の特異な点を挙げると、それは不尽山という山が東国の山であるということである。それまでの(山讃め歌)が、泊瀬山にしろ三諸山にしろ時々の京師の周辺にある山であったのに対し、不尽山という対象はあまりに辺境の山であるといえるだろう。それは、あまりにも大きな視点の飛躍というべきであらう。

二

赤人歌といひ虫麻呂歌といひ、伝統的な発想の順調な発展の上に出来するものではないらしい。逆にいえば、それだけこの二つの「不尽山歌」は、ほぼ同じ頃に現われるだけの共通の背景を持っていることが予想される。何故、ほぼ同時代に、同じようなそれまでの伝統から大きく飛躍した、これらの歌群が出来るのだろうか。

実は、「不尽山歌」と類想を持つ文学作品は他に指摘すること

が出来る。しかし、それは歌の世界ではなく、和銅六年の官命によって漸時各国で編まれたと思われる風土記の中に認められるのである。

夫筑波岳、高秀_二于雲_一、最頂西峰嵒嶮、謂_二之雄神_一、不_レ令_二登臨_一。但、東峰四方磐石、昇降峽屹、其側流_レ泉、冬夏不_レ絶。
〔常陸国風土記〕筑波郡

筑紫風土記曰、肥後国關宗県。々坤廿餘里、有二_一禿山。曰_二關宗岳_一。頂有_二靈沼_一。石壁為_レ垣。計可縱五十丈廣百丈深或廿丈或十五丈。清潭百尋、鋪_二白練_一而為_レ質。彩_二浪五色_一、緋_二黃金_一以_レ分_二間_一。天下靈奇、出_二茲華_一矣。時々水滴、從_二南溢流_一、入_二于白川_一、衆魚醉死。土人号_二苦水_一。其岳之為_レ勢也、中_二平天_一而傑峙、包_二四県_一而開_レ基。触_レ石興雲、為_二五岳之最首_一、濫_レ觴分水、寔群川之巨源。大徳巍巍、諒人間之有一。奇形杳々、伊天下之無_二雙_一。居_二在地心_一、故曰_二中岳_一。所謂關宗神宮、是也。

〔「新日本紀」卷十所引「筑紫風土記」逸文〕

各地の名山靈峰について記した箇所であるが、その山の捉え方が「不尽山歌」と通ずるものがあることが了解されるはずである。

「不尽山歌」では「高く貴き」(三二七)「高み恐み」(三三二)とその高さに対する感動を述べるのが、伝統的発想にはあまり見られないものであること、前節で述べた通りである。しかしこの視点は、筑波岳に於ける「嵒嶮」「峽屹」や、關宗岳の「傑峙」「巍巍」といった表現に通じることが了解される。

そして、不尽山が辺境の山であることも、風土記的視点に關係することであろうことは容易に想像される。

更に風土記の記述と「不尽山歌」との類似点を指摘して行く。「不尽山歌」では、両歌群共通して雲との比較によって山の高さをいう。「白雲もい去きはばかり」(三二七)「天雲もい去きはばかり」(三二九、三三二)がそれだが、これは筑波岳の「高秀_二于雲_一」に通うものである。關宗岳については、峰と雲の位置關係は逆転しているが、「触_レ石興雲、為_二五岳之最首_一」の表現がある。なお、歌に於いてこれと類似の表現は、赤人たちとは同時代の僧通觀の詠に、

み吉野の高城の山に白雲は行き憚りて棚引ける見ゆ

(3—353)

があるくらいである。

又、三一九歌は「こちこちの国のみ中ゆ出で立てる」と、国の中心に山が屹立する様を歌っているが、これは關宗岳に於ける「包_二四県_一而開_レ基」や、「天下之無_二雙_一、居_二在地心_一」という捉え方と同じであることが判る。

更に、三一九歌で「不尽河と人の渡るも其の山の水の当ぞ」と、一見山嶺めとの脈絡がつかみにくい川のことに触れるのも、筑波岳の「其側流_レ泉、冬夏不_レ絶」や、關宗岳の「濫_レ觴分水、寔群川之巨源」を見ると、これらの山の描写には欠かせない要素であったらしいことが判る。そうすると、三一九歌の「石花の海と名付けてあるも彼の山の包める海ぞ」も、關宗岳の「頂有_二靈沼_一」以下の記述の視点と無關係ではあるまい。

見て来たように、赤人や虫麻呂の「不尽山歌」は、一部の風土記の記事と類似が存することが判る。では、「不尽山歌」と風土

記の記事としては、その時代的前後関係はどうであろうか。この点については、双方共に成立年代を確定出来ないため明確に断言することは困難である。ただ、現在までの研究の結果、『常陸国風土記』は養老から神亀の頃の成立とする見方が優勢の如くである。⁽³⁾又、『筑紫風土記』と称する九州一円の記事を総括して記録したと思われるものについては、逸文の中に「天平四年」の記事が見られること(筑前国)から、それ以降まもなくの成立と考えられている。⁽⁴⁾従って、両風土記の成立年代については、養老から天平にかけての頃と考えて大きな誤りはなさそうである。すると、それは丁度、万葉の第三期に相当する時代であり、赤人や虫麻呂の活躍期と重なることになるのである。大雑把な捉え方をするならば、『万葉集』の「不尽山歌」も風土記の記事も、ほぼ同時代の成立といえる。

三

以上の考察によれば、万葉第三期の頃に、長歌や散文に於いてそれまでの伝統から飛躍した「山の文学」がまとまって登場して来るという現象が指摘出来るようである。ここで当然問題となるのは、そのようなものが何故ほぼ同時代にまとまって出て来るか、である。

その問題を考えるには、これら新しい「山の文学」の共通の発想・表現が何に習ったものなのかを考えてみるのが良い。おそらく、その源は漢籍に求めることが出来るようである。

山を讃美する視点として、その高さに注目することが、日本の

伝統から外れることは先に触れた通りであるが、これがそもそも漢籍からの学習であるようだ。例は『懷風藻』の遊覧詩を見るだけでも多数挙げることが出来る。特に、赤人歌の「高く貴き」(三一七)のように、山の高さを「貴」いと捉える発想がいかに漢文の発想であることは、小島憲之氏の指摘がある。漢籍の例として、小島氏は陳顧野王之「虎丘山序」の「太華神掌、以削成而称⁽⁵⁾貴」を挙げるが、その他にも、

●山莫⁽⁶⁾尊⁽⁷⁾於岳⁽⁸⁾、沢莫⁽⁹⁾盛⁽¹⁰⁾於瀆⁽¹¹⁾。(張昶「西嶽華山堂閣碑序」)
などの例を見ることが出来る。

そして、その高さをいう場合に、「不尽山歌」も風土記の記事もいずれも雲との関係を言うことについても、同様の発想を漢籍に多く見出だす。

○崑崙天竦、五岳雲停。

(庾肅之「山贊」)

○山峰嵯峨、凌雲洛⁽¹²⁾竦。

(荆州記⁽¹³⁾)

●崇⁽¹⁴⁾嶠⁽¹⁵⁾以雲繞、竦秀壁⁽¹⁶⁾於蒼眉⁽¹⁷⁾。

(栢玄南「遊衡山序」)

又、關宗岳の記事で「触⁽¹⁸⁾石興雲為⁽¹⁹⁾五岳之最首⁽²⁰⁾」とあったのは、『書経』「大伝」の「五岳皆触⁽²¹⁾石而出⁽²²⁾、雲」を直接の典拠と認めて良からう。山から雲が湧き出るという発想は、他にも漢籍に例が多い。「こちごちの国のみ中ゆ出で立てる」式の、つまり山が国土の中心に屹立するというモチーフも、漢土高山の中でも最高峰とされる崑崙山について、

○崑崙山天中柱也。

(「竜魚河図」)

崑崙墟在⁽²³⁾西北⁽²⁴⁾。去⁽²⁵⁾嵩高⁽²⁶⁾五万里。地之中也。

(「水経注」「河水篇」卷一)

と述べる漢籍の表現から出たものだろう。

更に、日本の四例中三例がそれぞれの山から流れ出る川について言及しているのも、海彼の山の記述の方法から学んだものだろう。例えば、『拾遺記』卷十には大陸の諸名山についての地誌が収載されているが、その記事を見てみると、

南有「九河分流」。赤陂紅波、千劫一竭。千劫水乃更生也。

（崑崙山）

を始めとして、悉くその山に源を発する河川について言及していることが判るはずだ。例を挙げればきりが無いが、要するにこのような視点は、『易経』で「山沢通氣」（説卦）といい、また『博物志』に見られるような、四瀆八流悉く名山より出づ、という考え方から由来するものである。不尽山、關宗岳でそれぞれ石花の海や「靈沼」について触れるのも、これと同じ発想であろう。

以上、「不尽山歌」と風土記の表現に共通の要素について、それぞれが漢籍からの影響が指摘出来ることを示した。しかし、漢籍表現との類似は、まだまだ指摘出来る。

まず、赤人歌の「度る日の陰も隠らひ照る月の光も見えず」（三七）について。これについては、早く契沖が『代匠記』で漢籍との類似を指摘する。（総じてこの「不尽山歌」の漢籍との類似の多さに最も早く気が付いたのが契沖だったといえる。果してその類似を、直接影響と考えていたかどうかには少々疑問もあるのだが、契沖のこの慧眼は大いに再評価されるべきである。）契沖は、「岑巖參差、日月蔽虧」（司馬相如「子虛賦」「文選」）などの例を示す。この後、林古溪や小

島憲之氏⁽⁸⁾もいくつかの例を示しているが、まだその他にも次のような例が挙げられる。

窮岫泄⁽⁹⁾雲、日月恒翳。

（左太冲「魏都賦」「文選」卷二）

● 日月虧蔽、栢栢杳杳。

（庾信「終南山義谷銘」）

崑崙山有「昆陵之地」、其高出日月之上⁽⁹⁾。

（拾遺記）第十（崑崙山）

この相当量の類想の存在から、漢籍に於いてこの手の表現が、高山の形容として常套化していたことが判る。最近、梶川信行氏が赤人の「不尽山歌」を論じた中で、日や月が隠れてしまうのは上代人としては非常に不吉な事態であるとし、「常陸国風土記」の伝説を引用した上で、当時不尽山には呪われた山とするイメージが存在しており、赤人歌は、その不尽山を慰撫鎮魂する歌だとする。

「近代的な作品鑑賞とは別の目で、もう一度読み直してみる必要がある」とする梶川氏の姿勢は、基本的に稿者も見習う所であるが、氏の論の主要な論拠の一つである「度る日の…」の表現は漢籍の常套表現の翻案と考えるのが自然であり、その他、これまでの考察からも梶川氏の解釈には従い難い。

次に「時じくぞ雪は落りける」（三七）について。不尽山の雪については、赤人の反歌や虫麻呂の長歌と第一反歌にも見られる。不尽山には年中雪が降っていると考え方は、『駿河国風土記』逸文の内容からして土着の伝承に存在し、虫麻呂の三二〇歌もそれを踏まえているようなのだが、

○ 昼夜蔽⁽⁹⁾日月、冬夏共霜雪。

（謝靈運「登廬山絕頂望諸嶠詩」）

○ 陰澗落⁽⁹⁾春榮、寒巖留⁽⁹⁾夏雪。

（孔稚珪「遊太平山詩」）

などの表現や、『山海経』の申首山（西山経）や小咸山（北山経）など所々に見られる「冬夏有雪」といった記事に裏打ちされて、不尽山の偉容を表す表現として採用されているのであろう。

虫麻呂歌の表現についても、他にいくつかの漢籍の影響を認めることが出来る。

長歌の「飛ぶ鳥も翔びも上らず」については、契沖が『説文』の「岱山高峻、鳥飛不越」との類似を指摘するが、鳥すらも飛んではいけない、といって山の高さを強調するのも、漢籍で良く目に出来る表現のようである。

鳥道乍窮、羊腸或斷。

（庚信「秦州麦積崖仏龕銘」）

翠微横鳥路、珠潤入星橋。

（李巨仁「登名山篇」）

右のような例を見ることが出来る。また、「不尽山歌」より時代は下るものの、我が国『経国集』にも「危巖于鳥路」（巨勢識人「奉和巫山高」と見えているのは、やはり漢籍の類想を学んだものだろう。

又、「日本の山跡の国の鎮」というシヅメは、既に小島憲之氏の説くように、漢語「鎮山」の翻案である。『続日本紀』の平城遷都の詔（和銅元・二）に「四禽叶図、三山作鎮」の例があるが、歌語としては全くの孤語である。そして、それに続く「宝とも成れる山かも」にも注目して良からう。万葉歌に於いてタカラという言葉は、仏典語の「無価宝珠」や「七種珍宝」の翻訳としてのもの（それぞれ3—345、5—904）の外、諸国が天皇に貢納する「御調宝」（18—14094）、「蟻衣の宝」（16—13791）など、どれも具体的な物質について言ったもので、有名な憶良の、

銀も金も玉もなにせむにまされるたからこにしかめやも

（5—1803）

のように、子供を「宝（のように大切なもの）」とする表現も、銀金玉と対比させることで初めて可能であった如くである。そう考えると、三一九歌の「宝」も、「宝のように大切なもの、重要なもの」という、比喩的かつ漠然とした捉え方よりも、もっと具体的なもの（山から産出する金銀璧玉の類）を想定すべきかもしれない。そう考えると、

今夫山一卷石之多。及其广大草木生之、禽獸居之、宝藏興焉。

（礼記「中庸」）

などという、山は数々の珍宝を蔵するという概念から、やはり『拾遺記』などで各名山に産する金銀璧玉を列記する姿勢に学んだ結果ではなからうか。ただ、具体的な物質については特に触れず、漠然とした表現になっているのは、実際には当時、不尽山からは鉱物等の産出が確認されていなかったため、天下の「宝蔵」たる山という概念だけが先行してしまったためであろうか。

四

以上の考証から、赤人・虫麻呂いずれの「不尽山歌」についても、漢籍の山の表現に学ぶ所が大きかったことが判る。そして、それは上代文学全般に見られる漢文学の落した影の一例として済ませてしまうには、あまりに大量なものであった。この影響関係を、単に表現レヴェルの問題として片付けてしまうわけには行かない。本稿の最初にも見た通り、不尽山の如き辺境の高山を、そ

の広大さを中心に讃仰するという一群のテーマそのものが、歌の伝統的発想からは出来ないものであった。赤人や虫麻呂は、この作品を通して、新たな「山の文学」を創造しようとしているかの如くである。

では、そのような「山の文学」創造の動きは、どのような事情から出来るのだろうか。ここで重要になって来るのが、「不尽山歌」との類想を持つものとして、風土記の文章があるという事実である。

風土記編纂の動きは、和銅六年に発せられた左の如き官命に端を発するというのは、ほぼ定説になったといつて良からう。

畿内七道諸国、郡郷名著「好字」、其郡内所生銀銅彩色草木
禽獸魚虫等物具録「色目」、及土地沃瘠、山川原野名号所由、
又古老相伝旧聞異事、載「史籍」言上。

解釈については多少問題を残しているようであるが、かなり多岐に渡つての言上を命じている。しかし、現存の諸風土記を見ると、その内容の傾向に著しい差があることが判る。『播磨国風土記』は「山川原野名号所由」の載録に多大な努力が払われ、それ以外の項目はほとんど付け足しの感がある。一方、『常陸国風土記』などは「古老相伝旧聞異事」に重点を置いていゝといえようか。兎に角、このような国ごとの傾向の差異は、風土記の編纂方針については、各々の国の編纂者の裁量に任されていた部分が相当大きかつたためだろう。

各国の地理風俗について言上せよ、但し書式や内容は各国の裁量に任せる、ということになると、編纂者たちの間で当然問題に

なるのは、何をどう書くか、ということである。一応、風土記の原初形態は解文として答申されたものらしいので、冒頭末尾の書式は定つたものがあつた。しかし、実際の報告部分は、それまで例が無い上に内容が多岐に渡るため、各国の編纂者は相当に苦慮したことであらう。そのような時、まず手本とされたのは、海彼の地理書『山海経』『水経注』……であつたろうことは既に指摘がある。そのように、漢籍を手本として文を成して行くうちに、書くという行為を通して、編纂者は地理風俗に対する新しい視点や認識を獲得して行くのである。特に、事務的な報告文に終始せず、所々に駢儷体の文飾を施す『常陸国風土記』や九州風土記のあるものに於いては、より多くの漢籍の知識が必要とされ、知識を吸収するための学習の結果、より多くの新しい認識を獲得することになるのである。

以上のことを、当面の「山の文学」の発生に引きつけて考えると、次のようになる。風土記記述に当って、山をどのように記すかという問題が起こつた際、編纂者としては当然『山海経』や『拾遺記』などを参観することになる。更に漢籍に於ける山の描き方を深く知ろうと思えば、類書の山部あたりを繙くのが手っ取り早い。と、そこには日本の伝統には無い視点から、山そのものの偉容を讃仰する数多くの文学作品が存在することを発見するであらう。風土記を書くという行為を通して、山に関する新たな認識を拡大した編纂者たちの表現意欲は、風土記編纂という枠を越えて、やがて「山の文学」創造の意欲に発展して行く。風土記を単なる報告文に終らせまいとした文学意識（それは従来の評価の

如く〈粉飾〉というマイナス面ばかりが強調されるべきではない。上代日本人が新たな認識を広げて行く重要なプロセスである）は、やがて海彼の〈山の文学〉を自らも手がけることを目論むようになる。その結果、世に排出したいくつかの〈山の文学〉は、まず漢文体の作品であつたろう。ところが、上代の漢文作品が『懷風藻』を始めとする極限られた作品群しか残されぬ今日となつては、どれほどの作品が存したのか確かめる術もない。しかし、そのようにして新たななる〈山の文学〉を愛好する人々のサークルの中で、やがてそれを伝統的な長歌のスタイルに翻案して製作してみようという気運が高まり、その中で出来て来るのが、赤人歌であり虫麻呂歌だったのでなかろうか。

勿論、漢詩文の発想を長歌体とはいえ日本の歌に翻案するのは、そう簡単なことではない。しかし、周囲の文学の動向を一早く察知し、一群の新たな作品を作り出してみせることこそ、専門歌人たちの腕の冴えだったのではなかろうか。

赤人と虫麻呂の「不尽山歌」出現の共通の背景について考察してみた。以上の考察を前提として、次にはやはり二作品の詠風の違いから各作家論へと発展して行くべきであろうが、それについては稿を改めて述べてみたいと思っている。

注(1) 三二一歌左注の指示する範囲については、三二一歌のみとする考

え方も存するが、本稿は沢瀉久孝『注釈』等の見解に従い、三二一

〵三二一全体を示すものと見るのが自然であるとする立場に立つ。

(2) 虫麻呂歌のみについてであるが、西宮一民氏『全注』に「常陸国

風土記」の筑波岳の叙述との類似を指摘する。重要な指摘である。

(3) 最近の論としては久信田喜一氏「常陸国風土記」の成立年代について」『芸林』37・1、一九八八・3が詳しい。久信田氏は同風土記の成立を「養老五年以後、少なくとも神亀三年以前」と結論付けている。

(4) 秋本吉郎「九州及び常陸国風土記の編述と藤原宇合」『国語と国文学』32・5、一九五五・五など参照。

(5) 「上代日本文学と中国文学」中第五篇第五章。

(6) 「博物志」本文は以下の通り。四瀆、河出崑崙墟、江出岷山、济出王屋、淮出桐柏。八流亦出名山。……

(7) 「万葉集外来文学考」(一九三二・七)。

(8) 注(5)に同じ。

(9) 「赤人の〈叙景歌〉ということー「望不尽山歌一首」の再検討を通して」『語文』76、一九九〇・三。

(10) 注(5)に同じ。

(11) 小島憲之氏「上代日本文学と中学文学」上第四篇第一章。

(12) 今は漠然とこう指摘するしかないが、常陸・筑紫両風土記共通の述作者として藤原宇合を想定する説が秋本吉郎によって唱えられて(注4の論文)、虫麻呂と宇合との関係が諸家に依って想定されていることは、本稿にとつて非常に興味深い。赤人には、やはり東国に取材した「勝鹿真間娘子歌」(3・四三二〜四三三)があるが、これも虫麻呂歌(9・一八〇七〜一八〇八)と共通の歌材であることも含め、「不尽山歌」成立の場の想定も、今後の重要な課題と思われる。

※ 本稿引用の漢籍の内、○を付したものは『藝文類聚』の、●を付したものは『初学記』の、それぞれ「山部」所引本文であることを示す。